

金融動向

◇金融市場、おおむね平穩に推移

9月の金融市場は、銀行券の増発が比較的小幅にとどまったうえ、財政資金が季節的にかなりの払超となったためおおむね平穩に推移、本行の市中保有債券の売戻し(月中80億円、うち対農中70億円)が行なわれたにもかかわらず、本行貸出は468億円の減少となった。

コール市場は、月末には決算期などの関係でさすがに一時的な引き締まりがみられたが、これを除くと通月おおむね平穩に推移した(コール・レート無条件もの、27日まで日歩2銭、月末2.4銭)。

9月の銀行券は、前月末土曜日の関係もあって月央まできわめて順調な還流をみたため、月中で

資金需給表

(単位・億円、カッコ内前年同月)

		38年7月	8月	9月
本行勘定	銀行券	△ 78 ( 128)	△ 330 (△ 495)	87 ( 112)
	財政	△ 1,405 (△ 164)	△ 1,531 (△ 1,029)	635 ( 622)
	本行貸出	1,149 ( 327)	232 ( 123)	△ 468 (△ 630)
	本行保有手形売買	— ( —)	— ( —)	— ( —)
	債券売買	391 ( —)	980 ( 489)	△ 80 (△ 2)
全国銀行勘定	貸出および 有価証券	2,562 ( 1,579)	1,763 ( 1,023)	3,546 ( 2,165)
	預金および 債券発行	545 ( 318)	1,146 ( 1,096)	6,559 ( 4,395)
	その他の	295 ( 416)	△ 14 ( 123)	△ 1,376 ( 1,049)
	ポジション	△ 1,722 (△ 845)	△ 631 ( 196)	1,637 ( 1,181)
	本行借入	1,273 ( 234)	432 ( 81)	△ 475 (△ 594)
	市場資金純受入れ	449 ( 611)	199 (△ 277)	△ 1,162 (△ 587)

(注) 1. △印……本行勘定の「銀行券」は還収超、「財政」は揚超、「本行保有手形売買」および「債券売買」は売却、全国銀行勘定の「その他」は負債の減少、ポジションは悪化を示す。  
2. 38年9月の全国銀行勘定は暫定計数。  
3. 市場資金純受入れ=(マネー)+(本行以外からの借入)-(ローン)。

87億円の発行超(前年発行超112億円)にとどまった。このため、月末発行高、月中平均発行高、季節調整済み平残のいずれでみても、銀行券は引き続き落ち着いた足どりを示している(月末発行高では前々月+16.6%、前月+18.5%に対し、当月+18.2%、月中平均発行高では前々月+17.7%、前月+17.1%に対し、当月+18.0%、また季節調整済み平残では前々月11億円、前月108億円に対し本月161億円のそれぞれ増加)。こうした推移で知られるように、企業の手元補てん一巡後の現金需要は、所得・消費の伸びにほぼ即応したのとなっており、当面こうした落ち着き圏内の増勢に推移すると思われる。

銀行券関連指標の動き

	前年同月比		前月比 (季節調整済み)		貨 所 得 前 年 比	百貨店 売上高 (東京) 前年 比
	月 末 発行高	平 均 発行高	月 末 発行高	平 均 発行高		
37年	%	%	億円	億円	%	%
7～9月	+15.4	+14.6	150	87	+18.2	+11.1
10～12月	+16.1	+14.8	168	137	+14.3	+10.4
38年						
1～3月	+16.2	+15.7	304	272	+13.3	+15.3
4～6月	+19.0	+17.8	199	251	+14.7	+16.2
7～9月	+17.7	+17.6	173	93		+17.9
6月	+18.3	+18.2	300	432	+16.3	+19.8
7月	+16.6	+17.7	82	11	+17.5	+14.8
8月	+18.5	+17.1	277	108		+18.1
9月	+18.2	+18.0	159	161		+23.8

(注) 1. 貨金所得は名目貨金指数×常用雇用指数。  
(いずれも労働省調べ、昭和35年平均=100、全産業)。  
2. 百貨店売上高は日本百貨店協会調べ。  
3. 季節調整はセンサス法による。

一方、9月の財政収支は635億円の払超(前年は622億円の払超)となった。まず純一般財政では、税収、専売収益、および事業会計収益などが引き続き好調であったにもかかわらず、予算規模拡大に伴う地方交付金の増加、義務教育費などの一般会計諸払の増加ならびに融資増大を主因とする資金運用部の受超減など、かなりの払超要因の増加があったため、結局4億円の払超(前年は39億円の受超)となった。また食管会計も、一時は不作を伝えられた本年度産米の作がらがその後持ち直し、早場米の買入れが進捗しているうえ、輸

入食糧買入費、農産物買入費の支払の増加もあり、前年を上回る払超(605億円、前年は416億円)をみた。一方、外為会計は、国際収支の基調悪化を映じ、払超額は僅少(26億円、前年は246億円)にとどまった。このように財政収支尻の払超額は前年とはほぼ同じでも、その内容にはかなりの差異があり、ことに税収の好調、外為会計の払超減など一方で揚超要因が強まっているにもかかわらず、予算規模拡大の支出面への影響が季節的払超期にはいって大きく現われてきており、上記の受超要因を相殺している点は注目を要する。

### 財 政 収 支

(単位・億円)

	38年 7月	8月	9月	37年 9月	36年 9月
(A) 純一般財政	△ 1,196	△ 1,252	4	△ 39	△ 132
うち租税	△ 1,992	△ 1,988	△ 2,149	△ 1,954	△ 1,756
(B) 食 管	△ 121	△ 382	605	416	176
(C) 一般財政(A+B)	△ 1,317	△ 1,634	609	376	44
(D) 外 為	△ 88	△ 103	26	246	△ 297
総財政(C+D)	△ 1,405	△ 1,531	635	622	△ 253

(注) △印は揚超。

### ◇銀行預金は期末のため急増、企業金融は引き続き余裕含み

9月の全国銀行勘定をみると、貸出は引き続きかなりの伸びを示したが、他方預金もこれを上回る大幅増加となったため、資金ポジションは1,637億円と、5月以来久方ぶりに顕著な改善をみた。とくに期末の預金吸収に全力をあげた都銀の好転が大きく、地銀、信託の好転は比較的小幅にとどまった。ただこれには期末という特殊事情が大きく響いており、その間かなり無理な操作も含まれているとみられるので、銀行の資金繰りの実体が、ポジションの表面計数が示すほどの改善をみたとは考えがたい。むしろ実体的には、ここ数か月来の悪化傾向を改めていないとみるのが妥当であろう。

9月の全国銀行貸出は3,001億円の増加と、引き続き前年実勢を6割かた上回る伸びを示した。一般に都銀、地銀とも、貸出意欲は依然根強いよ

うであるが、地銀の一部にはここ数か月来のポジション悪化を映じ、貸出抑制方針を打ち出した向きも散見される。

貸出増加の内容をみると、従来どおり業種別、企業別の較差がかなり目立っている。電力、鉄鋼、石炭などの大手筋が全般になお落ち着いているのに対し、自動車、電機、商社などの販売資金、化繊、石油精製、化学などの増産資金、設備資金は比較的大きい伸びを示している。また規模別にみると、大企業に比して中堅企業の資金需要(生産・売上げ増に伴う増加運転資金、金属、機械などの受取条件悪化や賃金・物価上昇などに伴う追加運転資金、品質向上、単価引下げのための設備資金など)が相対的に強いようである。一般に経済実体面の回復に伴う資金需要は、大勢落着きのなかにもじりじりと水準を上げてきているが、それに加えてとくに9月は、預金獲得のための貸出が計数を押し上げていることも見のがせない。

### 業 態 別 銀 行 勘 定 増 減

(単位・億円、カッコ内は前年同月)

	38年 8月			9月		
	都銀	地銀	長銀	都銀	地銀	長銀
貸 出	1,106 ( 637)	798 ( 386)	253 ( 145)	1,468 ( 913)	1,123 ( 782)	251 ( 145)
有価証券	- 433 (- 137)	- 74 (- 20)	24 (- 11)	395 ( 167)	106 ( 60)	47 (- 29)
実勢預金	309 ( 463)	339 ( 348)	91 ( 27)	4,429 ( 2,799)	1,559 ( 1,144)	- 3 ( 37)
債券発行高	11 ( 10)	- ( -)	229 ( 108)	11 ( 10)	- ( -)	213 ( 134)
そ の 他	- 263 ( 18)	143 ( 80)	74 ( 10)	-1,117 (- 746)	- 145 (- 163)	26 (- 33)
ポジション	- 616 (- 9)	- 242 ( 62)	117 ( 11)	1,460 ( 983)	185 ( 139)	- 62 ( 22)
借 用 金	338 ( 118)	56 (- 45)	- 29 (- 15)	- 554 (- 554)	- 0 (- 14)	16 (- 26)
うち 本行借入	410 ( 124)	41 (- 42)	- 19 (- 3)	- 494 (- 551)	0 (- 15)	11 (- 26)
マ ネ ー	27 (- 109)	8 ( 12)	- 39 (- 1)	- 906 (- 429)	- 6 (- 18)	3 (- 6)
ロ ー ン	- 251 ( 0)	- 178 ( 29)	49 (- 5)	0 ( 0)	179 ( 107)	- 43 (- 10)

(注) 38年9月は暫定計数。

「その他」の「-」は負債の減少。ポジションの「-」は悪化。

一方月中の全国銀行実勢預金は、6,335 億円と久方ぶりに貸出を上回る大幅伸長を示した。期末月の関係による各銀行の預金吸収努力と、コール資金の預金への振替など各種の預金操作に加え、増資払込金の滞留も大きかったことなどが、その主因とみられる。このような預金事情から推して通貨性預金の残高も、とくに月末にはかなり増加したようである。これに対し、預金通貨の流通高は増勢基調を続けているとはいえ、そのテンポは比較的ゆるやかであったとみられる(東京、大阪両手形交換所交換高の前年比は6、7月+17.3%、8、9月+18.9%)。その結果預金通貨の回転率は月中さらに低下したと思われる。ただ、前記のような預金についての特殊事情もあり、企業金融がこてへきてさらに緩和したとみるのは行き過ぎで

あろう。企業間の受取条件の好転も、鉄鋼大手など一部を除きあまりみられず、下請企業の受取条件はむしろ悪化している事例の方が多いようである。こうしたところから、企業側では先行きの金融基調について、目先の季節的な緩和を別とすれば、むしろ引き締まりの方向に推移することを予想する向きが増加している。

◇株式市況、低位もみ合い商状、起債は引き続き純減

株式市況は9月上旬末、信用取引決済の圧迫もあって昨秋来の新安値に落ち込んだ(9日、旧ダウ1,295)のち、中旬には、日証金残の漸減など取引関係の好転、決算期を控えた大手証券の積極買いなどから、一時持ち直しをみせた(17日、旧ダウ1,402)ものの、その後再び低迷市況に陥っており、10月にはいっても依然不景气市況が続いている。その間取引高も漸減し、最近では近年にない低水準に落ち込んでいる。このように低迷市況が続いているのは、国際収支不安などから大衆の投資意欲が依然沈滞し、証券会社の少々の買いささえでは一般の投資資金を引き出せなくなっているためである。株式投信の引き続き不振も、この間の事情を示すものといえよう。

9月中の増資は93社、704 億円と、前月に比べ59社 250 億円の大幅な増加を示し、年初来の最高

株 式 市 況  
(東京市場第1部)

	ダウ平均株価		予想平均 利 回 り		株 式 出来高	日証金 残 高
	旧	新	東 証 225種	う ち 有 配		
			%	%	百万株	億円
38年						
8月31日	1,349	253	4.39	4.67	36	368
9月4日	1,320	248	4.49	4.77	51	359
9日	1,295	243	4.57	4.86	59	338
12日	1,358	255	4.37	4.63	135	324
17日	1,402	263	4.24	4.49	156	333
23日	1,355	254	4.35	4.62	94	328
30日	1,301	244	4.53	4.81	66	303
10月3日	1,318	247	4.50	4.77	48	299
5日	1,361	255	4.36	4.62	113	306
11日	1,331	250	4.45	4.72	61	314
14日	1,319	248	4.49	4.76	32	311

預 金 通 貨 関 連 指 標 の 動 き  
(単位・億円、前年比%)

	預金通貨残高		流通高指標 (全国・前年比)		通貨回転率	
	増減額 (含み季 節調整 済み)	前年比	手 形 交換高	為 替 交換高	手 形 交換高 (含み季 節調整 済み)	商 品 取引高 (前年 同期)
37年						
4～6月平均	422 (473)	+ 6.2	+16.1	+14.4	2.27 (2.13)	1.110 (1.073)
7～9月〃	96 (645)	+ 8.5	+15.5	+10.6	2.38 (2.12)	1.112 (1.198)
10～12月〃	1,231 (820)	+15.0	+15.5	+13.5	2.35 (2.08)	1.036 (1.165)
38年						
1～3月〃	1,842 (1,158)	+31.6	+ 5.7	+12.0	1.91 (1.91)	0.914 (1.122)
4～6月〃	1,730 (1,215)	+41.5	+20.4	+19.2	1.93 (1.98)	0.874 (1.110)
7～9月〃				+28.4		(1.112)
5月	1,447 (1,619)	+40.6	+21.5	+19.5	1.89 (2.00)	0.881 (1.109)
6月	1,806 (2,606)	+46.9	+12.0	+16.4	1.76 (1.77)	0.849 (1.096)
7月	△ 820 (△ 357)	+46.8	+24.7	+27.8	2.09 (2.11)	0.872 (1.122)
8月	△ 103 (1,235)	+46.3	+16.4	+25.1	1.96 (1.91)	(1.129)
9月				+32.2		(1.085)

(注) 1. 預金通貨残高は全国金融機関要求払預金残高。  
2. 通貨回転率は全国手形交換高および商品取引高それぞれの預金通貨残高に対する比率。商品取引高は鉱工業生産者出荷指数×卸売物価(鉱工業製品価格)に基準時の金額を乗じ、これと商品動態統計の卸売販売額を合成したもの。  
3. 季節調整はセンサス法による。含み調整は当局試算。

を記録した。これには収益面の好転を背景に、前月に続き自動車、商社などの業種で大口増資がみられているほか、決算月の関係から増資が集中したという事情も響いている。なお10～12月には約1,330億円(月平均443億円)と、年度前半(月平均319億円)に比べれば拡大傾向が見込まれるが、株式市況低迷などから既定計画の繰延べなど増資に対し慎重に構える気運も業界にはいくらかずつ浸透しているものとみられる。

### 増 資 状 況

(単位・億円、カッコ内前年同期)

	市場第1部 上場会社	市場第2部 上場会社	合 計
37年7～9月	1,515(1,562)	254(172)	1,769(1,734)
10～12月	1,001(1,751)	161(150)	1,162(1,901)
38年1～3月	717(1,392)	94(79)	811(1,471)
4～6月	452(1,466)	121(113)	573(1,579)
7～9月	1,155(1,515)	184(254)	1,339(1,769)
38年7月	129(459)	52(98)	181(557)
8月	371(668)	83(75)	454(743)
9月	655(388)	49(81)	704(469)
10月(見込み)	343(321)	44(67)	387(388)

9月中の公社債、事業債の起債状況を見ると、表面発行額では408億円と前月比16億円の増加であったが、償還額(定時償還をも含む)を控除した純増ベースでは前月に引き続き満期債の集中による圧迫が強く、223億円と前月比14億円方減少した。債券別にみると、電力債および地方債が純増ベースで前月比ほぼ横ばいであったのに対し、一般事業債、政保債は満期償還のほか抽せん償還がかなりの額に達したため、いずれも表面発行額の増加にもかかわらず、純増ベースでは8億円方減少を示した。

なお、事業債の個人消化は9月も引き続き増加しており、注目される(個人消化額の全体に占める比率、7月10.1%、8月11.0%、9月15.4%)。これは利回り面での有利性の再認識や株式市況の不さげなどを反映しているほか、証券会社の売込み努力も大きく寄与しているとみられる。もっとも、これらのなかには証券会社のシェア競争など

による無理な消化もないとはいえないようである。

一方、9月中の金融債(純増ベース)は都地銀および信金など中小金融機関の期末決算対策買いによる利付債買入れの増加もあって、前月比13億円の増加をみた。

加入者引受け電々債の利回りは、基調的には金融市場の小締まりから強含みとみられるが、米代金支払に伴う農中系統機関などからの引合いなど季節的要因もあって、10月にはいつてからは若干低下を示している(46年償還利付債利回り、8月末8.54%、9月末8.55%、10月12日8.50%)。

### 起 債 状 況

(単位・億円、カッコ内純増額)

	38年 8月	9月	前月比	38年10月 見込	37年 10月
事業債	227.6 (125.6)	238.0 (118.9)	+10.4 (-6.7)	244.6 (121.5)	162.3 (84.1)
一般	119.6 (63.5)	131.0 (55.6)	+11.4 (-8.0)	133.6 (69.9)	93.2 (36.7)
電力	108.0 (62.1)	107.0 (63.3)	-1.0 (+1.2)	111.0 (51.6)	70.0 (47.4)
地方債	38.0 (22.5)	27.0 (22.4)	-11.0 (-0.1)	27.0 (25.4)	26.2 (18.7)
政保債	126.0 (89.8)	143.0 (82.1)	+17.0 (-7.7)	103.0 (93.1)	93.0 (59.1)
計	391.6 (237.8)	408.0 (223.4)	+16.4 (-14.4)	374.6 (240.0)	282.4 (161.9)
金融債	745.9 (288.2)	795.4 (301.4)	+49.5 (+13.2)	920.3 (374.0)	734.1 (278.8)
利付	351.7 (230.4)	400.9 (243.5)	+49.2 (+13.1)	424.7 (253.0)	359.5 (249.7)
割引	394.2 (57.8)	394.5 (57.9)	+0.3 (+0.1)	495.6 (121.0)	374.6 (29.1)

(注) 1. 9月実績および10月見込みの純増額には一部推定数字を含む。  
2. 金融債の10月見込みは期待額。

## 実体経済の動向

### ◇生産の増勢基調続く

8月の鉱工業生産(季節調整済み)は、前月比+0.1%となった。7月には、鉄鋼を中心とする